

平成 25 年 7 月 21 日～28 日の期間、日本放射線技術学会平成 25 年度海外研修派遣会員として米国スタンフォード大学 Summer Symposium on State-of-the-Art Imaging に参加した。その際に学び、感じ、得たことを与えられたテーマごとに報告する。

1. 本研修に期待した事とその成果 私が本研修に参加した目的は、診療放射線技師の立場から海外の放射線技術学を学ぶことであつた。放射線技術の最先端を知り、またその技術をどのように臨床に活かしているのかを知ることができると期待した。成果としては、米国では放射線技術学の学問が存在せず専門分野が独立して存在していることが分かった。その専門分野内での研究は非常に進んでいるように感じた。ただその最先端の研究と臨床の場との距離は遠く、最先端の技術が臨床の場に活かされているとは感じなかった。その点は本邦のほうが進んでいるように感じた。本研修では放射線に対する総合的な学問である放射線技術学の素晴らしさを再認識し、米国の現状を知るよい機会となった。

2. 日米の診療放射線技師の違い 米国では診療放射線技師は Radiological Technologist(R.T.)とし、X 線撮影業務のみを行う。そこからスキルアップを望めば、モダリティごとの専門資格を取得し CT や MR、RI 等の業務を行う。専門資格には更新もあり、更新費用も必要となる。専門資格を得た技師はその業務のみを行い、他の業務には関与しない。そのため PET-CT が登場した際には混乱が生じたようだ。現在ではダブルライセンスを取得した技師が対応しているようであるが、当時は CT 専門技師が CT を PET 専門技師が PET を撮影していたようだ。本邦では考えられないことである。また米国では造影時に必要な静脈ラインの確保は技師の業務であつた。撮影条件の決定は M.D. や Ph.D., Medical Physicist が行い、明確に業務の分担化が行われていた。現地 R.T. との会話で、5 年ほど前に CT の被ばくが問題になった際、R.T. 自らが危機感を覚え Medical Physicist を要望したと聞き驚いた。本邦の診療放射線技師は全てのモダリティに対応可能であり、撮影条件の決定から読影可能な知識までも備えており米国 R.T. と比較すると優秀であると考え。R.T. と Medical Physicist との能力を備え持つ素晴らしい職種である。ただ、本邦でも専門技師認定が行われ専門性に特化する道をたどっているように感じる。全てに対応可能なシステムを持つ本邦の診療放射線技師制度の優れた点が米国風になってしまうのではと、危惧の念を抱く点もある。米国研修からは、そんな事も感じた。

3. 診療放射線技師の国際的視野 先に述べたように本邦の診療放射線技師の知識や技術は米国よりも優れている。そのため診療放射線技師が持つべきものは知識や技術の輸入ではなく、それらの輸出を念頭にいった国際的視野が必要であると考え。そのためには英語が必須であることを実感した。コミュニケーション方法としての会話すら上手いかわない自身に不甲斐無さを感じた研修でもあつた。他国の現状を知り理解したうえで、本邦の素晴らしい技術を伝え広めて行くために、研究者のみならず臨床の技師も国際的な視野が必要である。本研修で経験できた米国(他国)の技師との交流も重要であり、交流から得られる情報は非常に大きいと感じた。

4. 本研修での経験を今後の活動にどのように活かすか 本研修ではスタンフォード大学が取り組む最先端の研究に触れることができた。アーチファクトを特徴として捉え画像化する技術、分子イメージング、ペインイメージングや法医学等の他分野と共同研究を行い新しい技術の確立を目指す思考、研究をビジネスへ繋げる発想など得たものは大きかった。また、スタンフォードを共にした 20 人の仲間に出会え、多くをディスカッションできたことは一番の素晴らしい経験となった。仲間との出会いは私が自身のために何をすべきか、職場にどのように貢献するべきか、また診療放射線技師として学会の国際化にどのように接して行くべきかを自問するよい機会となった。今後は自らのモチベーションの維持はもちろん、国際的視野を持った診療放射線技師の必要性を宣伝できればと考える。

最後に、このような素晴らしい研修の機会を与えてくださった日本放射線技術学会、スタンフォード大学、GEHC-J の皆様、引率をしてくださった北里大学の佐藤英介先生、参加の後押しをして下さった徳島大学の富永正英先生、快く送り出していただきました徳島大学病院診療支援部の皆様、本当に素晴らしい時を共にさせていただきました第 8 期の皆様に深謝いたします。



現地 RT との交流会にて。  
この交流会が大変有意義な情報交換の場となった。(筆者 2 列目中央)